

いわて

戦後美術の精華展

2020年

10月3日(土)～11月29日(日)

開館時間／8時30分～17時まで(入館は16時30分まで)

休館日／月曜日(月曜が祝日の場合はその翌日)

定額料 一般／500(450)円、高校・学生／300(250)円、小・中学生／200(150)円
* ()内は20名以上の団体料金

【主催】萬鉄五郎記念美術館

【後援】岩手日報社、岩手毎日新聞社、盛岡タイムス社、河北新報社、朝日新聞盛岡総局、

読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、産経新聞盛岡支局、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、

テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、奥州エフエム、

花巻ケニアテレビ、まろえん花巻

「美術21」展覧会 1968

H-028-0114 岩手県花巻市東和町土居5-135 TEL.0198-424402 FAX.0198-424405

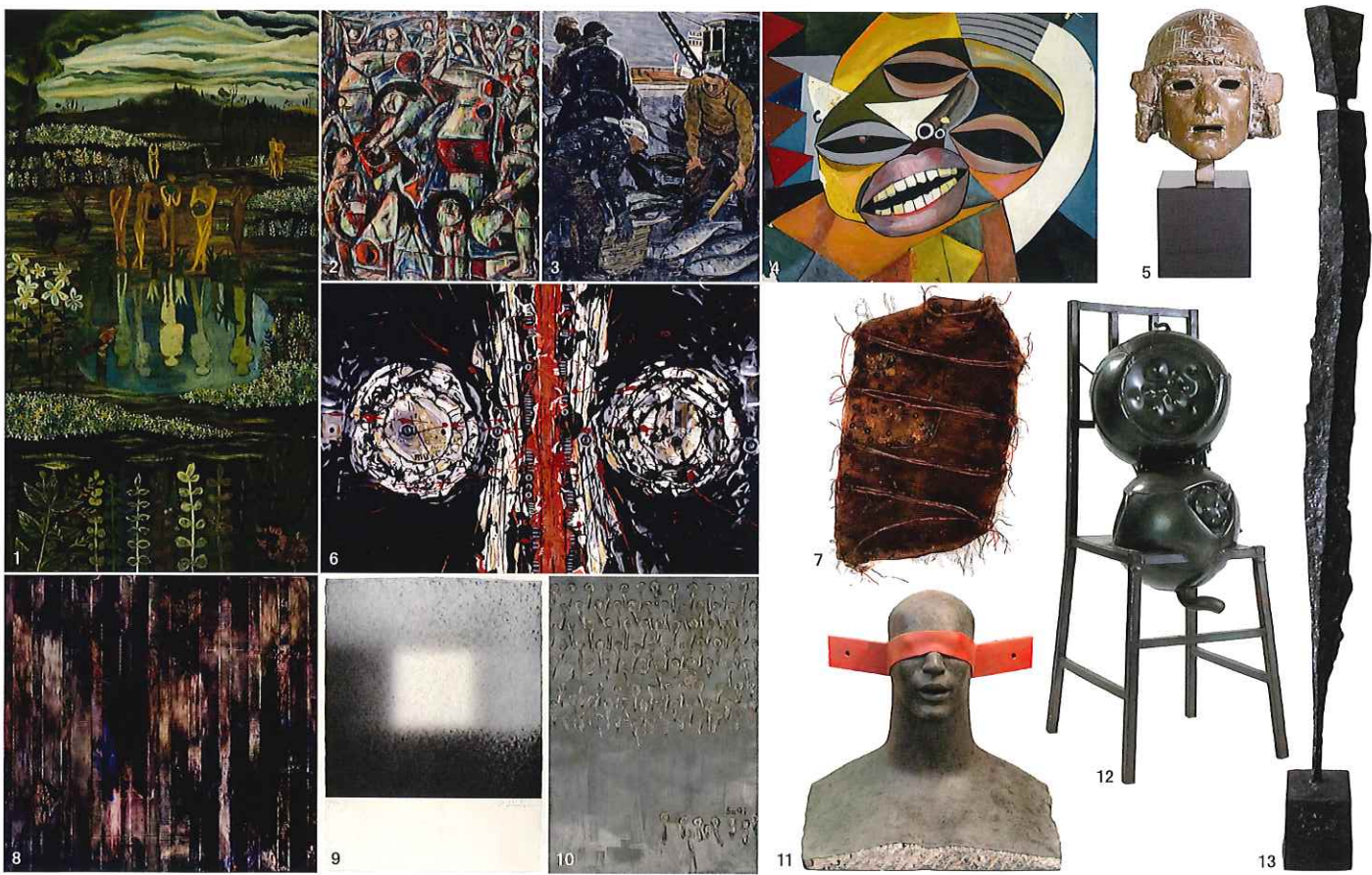
萬鉄五郎記念美術館

いわて 戦後美術の 精華展

岩手の戦後美術を語るうえで欠かせないのが、岩手県立美術工芸学校の存在です。終戦後間もない1948（昭和23）年に全国に先駆けて誕生した美術学校で、美術評論家の森口多里を校長に、中央で活躍していた深澤省三、紅子、舟越健次郎、保武兄弟や、堀江越、奈知安太郎などの地元出身の美術家が指導にあたり、他に類のないユニークな教育で多くの画家や彫刻家を輩出することになります。さらに、この学校が起点となりその精神は発展的に岩手大学の特設美術科開設へと受け継がれ、全国から多くの学生が岩手に集い、盛岡を中心にハイレベルの表現活動の華が咲くことになりました。

60年代には、この美術工芸学校出身の大宮政郎や棚山龍司、二科会を中心に中央で活躍していた村上善男に橋本正や杉村英一を加えて結成された「集団N39」の先鋭的な活動は、岩手の美術運動に拍車をかけ、次代を担う若者の目標となりました。その後、団体展もさることながら多くが個展を中心に活動を展開し、なかでも版画の概念を覆すような表現手法で話題を呼んだ百瀬寿を筆頭に独自の世界を展開する個性的な画家や彫刻家を多く輩出することになります。石彫の照井榮や版画の戸村茂樹に代表されるように、県内にとどまらない中央や世界での飛躍的な活躍が、今日の岩手の美術界を支え続けたとはいっても過言ではありません。

本展は、東北は無論のこと北関東以北でも他に類のない美術立県となった岩手の美術風土を彩った代表的な美術家の方々に構成するもので、地方の美術土壌を育んだ多彩な表現性のありようを見直す機会になれば幸いです。



1. 高橋忠彌「水汲み」 油彩・画布 1951（昭和26）年
2. 奈知安太郎「シルコ（サーカス）」 油彩・画布 1961（昭和36）年
3. 海野経「魚市場」 油彩・画布 1958（昭和33）年
4. 斎藤善「Pの仮面」 油彩・画布 1957（昭和32）年
5. 舟越保武「原の城（頭部）」 ブロンズ 1964（昭和39）年
6. 村上善男「共感」 油彩・洗面器・注射針・ボルト・紙・画布 1960（昭和35）年
7. 大宮政郎「cyborg plan4」 ポリエステル・鉄・金網・針金・他 1962（昭和37）年
8. 村井俊二「Untitled」 アクリル・綿キャンバス 1992（平成4）年
9. 百瀬寿「Square-Peversible, Black and Metallic Black thru Metallic Blues」 シルクスクリーン・和紙 1998（平成10）年
10. 杉村英一「限C」 はんだ・トタン 1964（昭和39）年頃
11. 照井榮「やまない吹雪」 安山岩・彩色 2010（平成22）年
12. 棚山龍司「使者」 軟鉄 1967（昭和42）年
13. 佐藤祐司「作品」 合成樹脂 2006（平成18）年

【主催】 萬鉄五郎記念美術館
 【後援】 岩手日報社、岩手日日新聞社、盛岡タイムス社、河北新報社、朝日新聞盛岡総局、読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、産経新聞盛岡支局、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、奥州エフエム、花巻ケーブルテレビ、えふえむ花巻

【入館料】 一般／500（450）円 高校・学生／300（250）円 小・中学生／200（150）円
 ＊（ ）内は20名以上の団体料金